

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団 体 名	(公財)厚木市文化振興財団	
施 設 名	厚木市文化会館	
助成対象活動名	人材養成事業	
内定額(総額)	3,816	(千円)
公 演 事 業		(千円)
人材養成事業	3,816	(千円)
普及啓発事業		(千円)

(2) 平成30年度実施事業一覧

【人材養成事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、 スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	あつぎ舞台アカデミー	平成30年4月~31年3月	講師：横内謙介・ラッキィ池田他 出演：小学4年生~中学2年生の受講生	目標値	534人
		展示室ほか		実績値	520人
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	534人
				実績値	520人

【妥当性】

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

地域に蓄積されている文化芸術や才能などの文化資源を見出し育み、それらをコーディネートする文化基盤として機能することが使命であると考え、厚木高校出身の演出家で劇作家である横内謙介芸術監督指導の下、事業計画を組み立てている。

今回、助成対象となった、演劇指導などを通じて舞台人をはじめとする文化芸術を創造する人材を育成する「あつぎ舞台アカデミー」は、第一線で活躍する文化的人材を講師やスタッフとして迎え、トップレベルの指導を受けることができる環境を作り、舞台公演の制作を行うことができた。事業計画を通じて、人材育成を行うことは、表現者の育成のみならず、本事業を中心に、文化活動を支援するボランティア活動の輪を広げるものとして事業を進めることができた。



衣装作成を手伝うボランティア



公演プログラムを配布するボランティア

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

市民満足度調査から文化芸術活動への重要度（関心度）が低い状況を踏まえ、厚木の文化に関心が高く充実したものに導くためには、文化芸術の人材・団体・コンテンツの「集約・整備を行い、文化的に人と人や団体を結びつけるコーディネートを積極的に行い、市民自らが参画できる文化活動を創造し日常的に文化芸術活動に触れる機会を増やすことが必要であると考えている。

人材養成事業で育成した人材が地域や行政のイベントへのゲストパフォーマンスやテレビ番組や著名人のライブへの出演などの外部出演を果たすようになり、今後より地域に密着した文化活動として、病院や学校などへのアウトリーチ等の実施を進めている。

加えて、会場運営や道具の作成、仕込み補助などの現場作業などの活動をサポートするボランティア体制が構築されており、近隣大学のインターン生の受け入れや大学生との交流など、表現者を育成するのみならず公演を運営する人材の育成活動にもつながっており、日常的に文化に触れる機会を広げることができている。

【有効性】

自己評価

目標を達成したか。

次世代を担う子どもたちが舞台上で表現をする体験を通じて、参加者自らが創造する力、コミュニケーション能力を磨くとともに、表現者の育成のみならず将来の観客・深淵者の輪を広げることを目指している。加えて、文化芸術を中心に市民が活発に交流し、新たな創造活動を行い地域に根付いた文化芸術の振興を図ることを目指している。

今回助成を受けた「あつぎ舞台アカデミー」は開講から9年目を迎え、舞台公演の制作や日々のレッスンなどの活動を周知することができ、地域の文化的アイコンとして、地域のイベントへのゲスト出演や厚木市の広報誌への定期的なモデル出演、さらには著名人の大規模なコンサートやテレビや舞台公演に出演するなど外部出演の機会が増え活動の幅を大きく広げることができている。

また、継続して文化的人材を育成することで、役者や歌手として活躍する「あつぎ舞台アカデミー」卒業生がでてくるようになり、凱旋公演を行う事例も出るようになった。さらには、育成を行う人材も輩出しており、文化芸術を支える人材の輪は厚木市文化会館から大きく広がりを続けていることができている。

これらの成果は、第一線で活躍する人材を人材育成の講師や舞台スタッフとして起用したことによりクオリティの高い指導を継続して行っていることにより将来の表現者を育成する充実した環境を整えることができてきているからである。確かに参加者の高い参加率及び高い満足度を維持している。しかしながら、講師の目が行き届いて指導できる環境を作るためには受講生の受け入れ人数に限りがあることが課題である。文化的な体験の門戸を広げるためにも、体験レッスンの企画などを定期的で開催するなどの試案が必要である。また育成した人材を会館内の創作活動だけではなく、地域に根付いた文化交流の活力としていかに社会に還元していくことが今後の課題である。



様々なイベントにあつぎ舞台アカデミー受講生が出演



横内謙介芸術監督が市民に直接演劇指導を行う

【効率性】

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

□事業期間について

将来の表現者を育成することを目指し、当初の事業計画のとおり、夏の舞台公演に向けての25日間の集中稽古(1日8時間)及び通常レッスンを年間30回(1レッスン3時間)で進行することができた。

本事業は既成の台本を使用するのではなく、子供たちが綴った作文を脚本家が脚本を書き起こし制作するオリジナルの作品を創作し、舞台経験のない子供たちを安全に舞台に立たせるためには多くの稽古日数を要してしまう。しかしながらこの日数をかけた稽古が舞台作品のクオリティ向上につながっているため適正であると考えます。

今後の課題として、日々の錬磨で積み重ねたものを社会に還元する機会が舞台公演以外にないため、地域へのアウトプットをすることができる地域に密着した新たな活動を行う必要があると考えている。舞台公演を創作することが主軸ではあるが、アウトリーチの開催や地域住人との交流など厚木の地域に還元することができる社会的活動を創作する必要がある。

□事業費について

横内謙介芸術監督を中心に一流の講師・スタッフを起用できているが、事業費の大半を人件費が占めている状況であるため、経費削減には困難を要する。しかしながら、地元企業や保護者を中心としたボランティアが衣装や道具の作成や手配のサポートを行ったこと、出演者以外の市民も公演制作に参加する機会を作ることができたことで、道具類の制作費を大幅に削減することができた。

その一方で収入はチケット料収入や受講料などの参加費だけでは補えず、助成金に加え厚木市の事業補助金によって補填している状況である。新たな財団の独自財源を生み出すことを目指し収益事業の収益を本事業に活用することや特定事業に限定した寄付の呼びかけや協賛企業の募集を行うことで新たな財源を開拓していく必要がある。

【創造性】

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

劇場と行政、そして文化人との連携が地域の文化拠点として大変重要である。そこで、厚木市では横内謙介氏(脚本家・劇作家)を(公財)厚木市文化振興財団より、「芸術監督」に任命し、厚木市より「厚木市文化芸術大使」に任命することで、「厚木市」と「厚木市文化会館の指定管理者」と文化的人材の代表として「横内謙介氏」の3者で文化芸術活動を支援する連携体制が確立されている。

また、横内謙介芸術監督が率いる劇団扉座とは、フランチャイズ契約は行っていないものの厚木に根差した劇団として創作上演活動を行っている。市民と会館と劇団扉座が連携して厚木の文化を盛り上げていこうと「厚木シアタープロジェクト」と題して演劇公演の上演のみならず、演劇講座やアウトリーチに平成11年より取り組みをはじめ、地域の文化的人材やプロの役者たちとが交流しながら創作活動を行っている。

これらの舞台に出演・参加している劇団扉座の役者たちが「あつぎ舞台アカデミー」の舞台公演を制作するにあたり演出助手や舞台スタッフなどの裏方として参加をしており、役者と市民との交流が生まれている。

さらに、展示会としての利用を目的としたフラットな200㎡もあるスペースとして厚木市文化会館にある展示室での稼働率は大変低い状況にあった。しかしながら、演劇などの創作活動の稽古場として開放することで展示室の新たな利用が広がり、施設利用率60.5%のうち4割を稽古場などの創作活動の場としての利用が占める状況まで利用率が向上されている。厚木市文化会館が創作したものを発表する場だけではなく新たに文化芸術の創造活動の場として文化を育み新たな文化作品を生み出すことにつながっている。



横内謙介氏をあつぎ文化芸術特別大使に任命



展示室を舞台稽古の創作の場として使用

【創造性】

自己評価

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

厚木らしさあふれる文化の創造発信の場として厚木市文化会館が展開する「あつぎ舞台アカデミー」は厚木文化のアイコンとして文化活動の周知に大きく貢献することができた。会館が発行する会館会報誌「ぶんか情報館」の存在も大きい。厚木市が発行する広報誌「広報あつぎ(8万部発行)」や神奈川新聞社、地元タウン誌の協力のもと公演情報や活動報告など記事を掲載することができている。平成30年度は厚木市が発行する「広報あつぎ」にて当館で行っている「あつぎ舞台アカデミー」をはじめ、文化活動が8ページにわたり特集され当館を中心に行われている文化活動を広く周知させることができた。また、地域のケーブルテレビのニュースコーナーへの定期的な出演も果たした。

また事業運営に際して、横内芸術監督を中心に公演をサポートする市民50人程が所属する「市民応援団」というボランティア組織の存在が特徴的である。彼らはチケットの手売り(総販売数の約30%を販売)や公演プログラムの制作、出演者やスタッフの宿泊や食事の世話、会場運営などを行っており公演を行う上で欠かせない組織である。また、このボランティア組織の担当業務は明確なうえに、代表者の含め組織化されているため、財団は代表者と調整するのみで指示系統が確立されている。

また「Atsugi Art Project」という文化芸術に親しんでもらうためのSNSなどを活用した文化に関する情報発信を行うボランティア組織として市と財団、文化団体が協力し2014年に立ち上げ、財団が手掛ける活動についても積極的に情報発信を行ってもらえる環境ができている。

また、ボランティアに参加するメンバーが持つ地域の企業とつながりを利用して寄付者や協賛企業の紹介などといった財団と企業をつなげる橋渡しの存在、コミュニティ・リーダーとしての機能も有している。また、「あつぎ舞台アカデミー」を行う中で、昭和音楽大学のインターン生の受け入れを行い、制作業務の補助として参加している。加えて、卒業生や保護者たちの会場運営や道具の作成、仕込み補助などの現場作業のボランティアも積極的に行われており、日常的に文化芸術活動に触れる機会が広がっている。



「広報あつぎ」にて文化特集（全8P）

【持続性】

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

人材育成をはじめ文化を育む取組みは、時代を超えても受け継がれ継続していくべきものである。しかし旧態依然の状態を押し通せば良いということではなく、本質的な良さを残しつつ時代とともに移り変わるニーズや環境の変化に適応していかなければならないものである。そして、現場の問題点も市民のニーズも時代とともに多様化しておりそれらも現状や課題、ニーズを吸い上げたものをベースに芸術監督の意見を反映させながら、事業計画を策定する組織体制を構築させるため平成29年に事業評価体制の見直しを行った。これにより、事業を企画することを優先するのではなく、現場の状況把握、利用者のニーズを把握することを優先した事業計画を行う体制にし、市民のニーズにかい離することなく持続して成長するサークルを形成することを目指している。

○事業評価制度の見直し

平成29年度より事業評価制度の見直しを実施。財団の基本方針と事業計画及び市民ニーズのかい離が生じることを防ぐことを目的に客観指数による事業評価とした。事業運営を監視するものではなく現場から湧き上がってくる課題・問題点を見つけ出すことを主の目的としている。

○芸術監督の起用

厚木高校出身の劇作家・演出家で劇団扉座主催の横内謙介氏を（公財）厚木市文化振興財団の芸術監督として任命。年2回横内謙介演出の作品を上演するとともに、彼が総指揮をする「あつぎ舞台アカデミー」を開講し、厚木の子どもたちに、演劇やダンスなどの指導を行いながらオリジナル脚本による舞台公演を上演している。加えて、芸術監督を迎え入れることで主催事業の方向性や年間ラインアップの策定の際の助言や、芸術監督が企画を行うイベントを実施するなど、企画力の向上および発信力のさらなる強化を図ることにより、芸術監督のネットワークを活用した事業を行い、知名度の向上を目指している。



横内謙介氏を財団 芸術監督に任命